

特別な学習支援を 必要としている子どもを 教える時の十戒

前編

ジョイス・イノウエ

通訳：稲葉寛夫

子どもたちは神の御手で
創られた素晴らしい存在

プロフィール

クリスチャン教育セラピー代表。白馬セミナー、主講師。学習障害、特別学習教育の専門家として35年。3人の子どもを育て、2人の子どもたちの聴覚・視覚等の情報処理の困難等を診断、訓練、克服し、大学卒業、ミニストリーへと羽ばたかせる。カリフォルニア州立大学院LA校特別支援教育修士課程卒。アズサ・パシフィック大、フレズノ・パシフィック大、チャ・カリフォルニア等で、特別講師。ACSI加盟クリスチャンスクール400校余りをネットする、学習障害サポート機関等も設立。

「学習障害があり、特別な学習支援を必要とする子ども」の定義は、以下のとおりです。明らかに問題を抱えているほどではなくとも、実際、学習面で困難をきたしている子どものことです。この「困難」は、彼らのIQや、心身の問題、頭脳の問題が原因ではありません。しかしながら、これらの子どもたちにとっては、各学年で求められる学習内容を習得することが困難である場合が多いのです。米国の研究結果では、5人に1人がこの学習障害を持っていると言われています。

イエスさまは、「すべて、疲れた人、重荷を負って

いる人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます」(マタイ11:28)と言われました。クリスマスチャンの親、教師としての課題は、これらの特別な支援を必要とする子どもたちが「魂の休み場を見つめる」手助けをすることです。そのためには、子どもたちがイエス・キリストと深い関係を築き、真理に関する知識を増すことが求められます。そして、子どもたちが優れた才能と多くの可能性を持つことに気づく必要もあります。

子どもたち1人1人は、決して失敗されることのない、神さまの御手によって、特別に素晴らしい存在として創られました。神の崇高な目的が彼らによって果たされるため、完全に成功した神の作品として創られたのです。また、神は、彼らを通してご自身の栄光を表し、世界中、世界中へと神の国を拡大していく特別な目的のためにも創られました。私たちは、子どもたちの個性を神さまの約束と真理の中で励ますことが大切です。子どもたちは決して希望を捨てるべきではありません。

「特別な学習支援を必要としている子どもを教える時の十戒」は、学習障害を持った子どもたちとその家族が直面する戦いに必要な道具であり、武器です。このセッションを通して、皆さんが力づけられ、教えられ、導かれるように祈ります。

第一戒 「子どもが与えられたのは、 神のご計画」

第一の戒めは、「子どもがあなたの人生に与えられたのは、神のご計画のゆえだということを知らなければなりません」です。

神さまは子どもたちを用いて、私たち親を成長させようとしています。それは、子どものための計画というより、親のための計画です。そのことはエレミヤ書にもあります。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ——それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来ご希望を与えるためのものだ。」

(エレミヤ29:11)

神さまは、子どもたちを通して親を、より一層、建て上げて下さいます。神さまは子育てを通して、私たち全員に、成長させる機会を与えて下さっているのです。この機会に、私たちの成長すべきところはどこか、神さまが働いて下さっているところはどこであるかを示していただきましょう。神さまは皆さんのどの部分を建て上げようかとされているでしょうか。

第二戒 「神こそ頼るべきお方」

第二の戒めです。「あなたには、わたし(神)のほかに、ほかの資源や戦略があつてはならない」。

「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって」と万軍の主は仰せられる。(ゼカリヤ4:6)

私たちは分析したり、リサーチしたりすることが必要であり、子どもたちに何が起つて、今どういう状況にあるかを知る姿勢が必要です。しかし同時に、それだけでは十分ではないことにも気づくことも肝心です。実際にやってみると、「ああ、自分は何も分かってなかった」とか、お金や時間が無いといった不足に直面していくことになるでしょう。専門家と話したり、いろいろな方の指導を受けたり、リサーチをどんどん進めて行く中で、神さまに心を向けることが逆に減っていくことが、しばし





■ 聖句カーグランプリ大会——白馬セミナーにて

私たちは、力や知

識、教員免許やカリキュラムによってではなく、神の霊によって、ただ子どもたちを「教える」だけではなく、彼らの人生に影響を与えられるように手を差し伸べることできるのです。

ということですが、

いろいろな方が私のもとにもやって来ます。「私の息子はADHDです」「娘には視覚処理障害があります」「息子は識字障害なんです」……。けれども、学習障害を持っているお子さんたちは、いろいろと重なった症状が多いため、簡単には診断できません。あるいは、単に疲れて集中力が切れているだけなのに、「この子はADHDなんだ」と、簡単にレッテル貼りしてしまうケースも多いので、注意する必要があります。

逆に、まだ表には見えてきていない障害があるケースもあります。たとえば、目は見えているけれども、視覚処理の部分で脳に障害があるという隠れたケースです。本当の問題は視覚処理にあるのに、「この子はADHDだ」と間違った診断をされるのがアメリカではすごく多いのです。ですから、簡単に「うちの子はADHDだ」と判断できませんし、専門家でもいろいろと診断が異なりますので、「この先生がこう言ったから」と鵜呑みにしないほうがいいと思います。大事なのは、子どもがどんな強い所、あるいは弱い所を持っているか、そこを一つの基準にして分析することがとても助けになります。その基準によって、正確な方法で子どもを助けていくことができ、子どもが本来持っている学業面での可能性に達することができるのです。

もちろん、病院での治療が奏すケースもあります。その一方で、うまくいかないケースもあ

ば起こります。それは大きな問題です。結局、時間の無駄となり、ますます解決の鍵を失っていくことになると警告したいと思います。

誰よりも、私たちのこと、子どもたちのことを存じなのは、神さまです。それこそ、最も大切なポイントです。神さまこそ私たちの究極的な診断の情報源であり、神さまの知恵こそ一番の鍵です。神さまは、専門家のリサーチも用いられますけれども、人の判断は外れることもありますし、間違った方向に行く可能性もあります。しかし、主に心を向けながらリサーチを進めていくなら、あるいは主にご自身に聞いていくなら、その時こそ、神さまが、最も皆さんを助けやすい状況になっていると言えるでしょう。

第三戒 「子どもの診断は あらゆる角度から」

第三の戒めです。「あなたは、いろいろな角度から見ることをなくして、子どもを診断してはならない」。

「知恵のある者はこれを聞いて理解を深め、悟りのある者は指導を得る」(箴言1:5)

アメリカには、いろいろな角度からチェックを行う専門家がいます。心理カウンセラーや医学療法士、あるいは、民間の専門家や小児科医などです。

ここでお伝えしたいポイントは、1人の専門家の意見で決めつけたり、安易に診断したりしないです

ります。間違った投薬がされると、結果的には症状を悪化させたり、子どもの将来をつぶしてしまう可能性も出てきます。ADHDはアメリカで一番、誤診が多いと言われていますから、複数の医師、専門家の意見を並行して聞くことが大切です。

第四戒

「子どものワクワク感を阻害してはならない」

第四の戒めは、「親は、子どもの心にある『ワクワク感』を阻害してはならない」。つまり、子どもがワクワクしながら話したり、打ち込んだりしていることを妨げないよつにという意味です。この『ワクワク感』とは、身体的に興奮状態にあるということではなく、心の中に興味が与えられたり、心から打ち込めることが与えられて喜んでいる状態のことを指します。

「あなたがたは、この小さい者たちを、ひとりでも見下げたりしないように気をつけなさい。まことに、あなたがたに告げます。彼らの天の御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。」(マタイ18:10)

この聖句の中で1つのごとばが、私のところに引つかりました。「見下げたりしないよつに」ということばです。私の2人の息子も、聴覚・視覚等の情報処理の困難等を抱えています。でも、自分

は子どもを見下げたりはしていないと思つたからです。

「見下げる」とは辞書によると、「軽蔑と嫌悪で見下す。取るに足りないもの、価値のないもの、不愉快なものとみなす」と書かれています。私たちはクリスチャンの親として、決して子どもたちを見下げる思いはないはずです。ですから、もしかしたら、次のよつなごとばが心にピンと来やすいのではないかと思いました。「十分な柔軟性や同情心をもつて接したりせず、愛情、思いやりを持っていないこと。あるいは子どものために喜んで自分の時間を割かないこと」。こう考えた時に、私の内に十分な柔軟性や同情するところが無かつたと気づきました。時間も十分、割いてないと思いました。私たちが子どもたちの話を聞く時や、教えたり励ましたりする時に、彼らはイエスさまの愛を感じていたでしょうか。もしかして、皆さんの中にも、そう指摘されて、こころを痛めている方がいるかもしれません。

でも、イエスさまの目的はそのことで私たちを責め立てることではないですから、誤解しないで下さい。自分で自分を責めることは神さまが望んでおられることではありません。神さまが願っていることは、自分の弱さに気づき、自制していくことです。たとえば、怒りが湧いてきた時に、そのこころを聖霊の力で、治めていくことを願っています。ただ、「自分はダメだ」というところで立ち止まるこ

とを願つてはおりれません。

第五戒

「完璧主義になつてはならない」

第五の戒めです。「完璧主義になつてはならない」。



■ チルミニにて——白馬セミナー

■ ジョイスさんはジョセフと仲良し

「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおつために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう」

(第二コリント12:9)

私たちの敵であるサタンも、子どもの学習障害を通して、私たちを攻撃する計画を持っているとは思いません。まず、子どもの将来に対して、親に不安を抱かせます。そして、親を孤独に陥らせ、いら立たせ、不安にさせ、信仰を揺さぶる計画です。敵は、特に皆さんが悩み苦しんでいる時に、一層、働

きます。そして、皆さんの心の不安をさらにおおりに立てるのです。

でも、私たちは神さまにあつて、敵よりも賢くなれますし、敵の策略を止めることができます。具体的には、どつしたら、止められるでしょう。完璧主義に陥らないことによつてです。子どもに対しても、自分に対しても——。エペソ2:11にあるように、神さまには、私たちに将来と希望を与える計画があるのです。

聖書のみことばによつて敵の働きを断ち切り、私たちの考えを変えていきましょう。それが神のみことばの力でもあります。ホームスクーリング

たちには、「神さまにあつて何でもできるのだよ」と教え続けることができます。これは、この社会のシステムに置き、学校に委ねることは教えられないし、教えきれないことです。

ぜひ、神さまの憐れみによつて進んでいって下さい。皆さんは、神さまから選ばれて、特別なサポートが必要な子どもたちを委ねられたのです。皆さんは、神さまの手、足、声、こころとなつて子どもたちを成長させていく役割を果たすために選ばれたのだと思います。子どもたちは、皆さんの愛を通して、世の基準や他の神々の中にはなく、イエスキリストの中に自分の希望とアイデンティティーを見出します。皆さんが、子どもたちにしてあげたこと、教えてあげたことによつて、神さまは忠実に子どもたちを導き、祝福し、教育して下さいます。

Q&A

Q 日曜学校に来ている子どもで、静かにできない子どもがいます。この両親はノンクリスチャンなので、教会とはつながりがありません。そうした子どもにはどう接したらいいでしょうか。

A まずは祈って下さい。2番目は、その子を愛して下さい。ノンクリスチャンのご家庭ということで、おそらく学校でも家庭でも、神さまからの愛を体験することは無いと思います。そういう意味で、まずは愛してあげて、教会にいとホツとするとい





う気持ちを、その子自身が感じていくことが大切だと思っています。また、日曜学校での活動自体も座っているだけではなくて、体を使った作業とか、いろいろな計画を立ててあげるといいかもしれませんね。神さまには計画があつて、その子を通して家族にも福音を伝える計画があるかもしれませんから、まず愛してあげてください。

Q 第五の戒めに「完璧主義にならない」とありましたが、どうしたらそうなれるのでしょうか。

A もし、怒りが湧いてきたら、まず自分自身を責め過ぎないことです。それは神さまが願っていることではないので、その時には怒りの対象から少し離れて、自制できる状態に身を置いて下さい。自分が悪いのだと、自分に怒りを持っていると、そこから苦みが出て来て、怒りがさらに増し、結局、自分はダメな人間なのだと思循環に陥ってしまいます。

皆さん自身が、イエスさまにあつて自分自身を赦していく姿勢があれば、子どもたちにとっても良い模範になってくると思います。

Q 第三の戒めでお話しされたことと関連しますが、たくさんの専門家から話を聞くことを勧めているのか、専門家も間違えることがあるので特に話は聞かず進んでいくことを勧めているのか、どちらでしょうか。

A まず大前提として、一番大事なことは神さまに聞くことです。分析する上で、多角的に情報を集めることも大事だと思います。ただし、病院に行けば、病名が診断され、薬を処方されてしまいます。カウンセラーの元へ行けば、「ここはこの部分に問題がある」と言われ、脳神経系に行けば、また別の診断がされます。つまり、専門家たちは専

門分野の限られた範囲でしか診断できません。そのあたりを押さえ、理解しつつ、情報を集めること自体は助けになると思います。

しかし祈りこそ、いつでも答えの鍵だと思えます。まずは神の視点をもってお子さんを見るようにして下さい。これが大事です。それが、子どもの症状を大きく変えていきます。神さまは子どもを奇しい存在として創って下さったのだという視点で見ること、一般の医師やカウンセラーとはまったく違うものが見えて来ます。そのうえで、トータルリサーチが必要なケースももちろんありますので、この神さまの視点を押さえたいうえで、リサーチしていくといいのではないのでしょうか。

実際、アメリカでは、本日は専門家に行く必要がないにもかかわらず、長期間、通院しているケースがとても多くあります。たとえば、読むことが遅い子どもに対しては、もつとビジュアルな本を見せることで楽しさを教え、「自分も学べるのだ」という喜びを重ねていくことによって、自信にもなり、状況がすくく変わってくる人が多いのです。その結果、病院で薬をもらったり、いろんなカウンセラーを渡り歩くといった無駄なことを避けることができます。そのように角度を変えて、子どもが喜び、励まされ、自信をつけていく体験を奨励することによって、子どもが勉強を楽しむように変えられていくのです。(次号に続く)◇